

第7回 円山川流域委員会 議事録(概要版) 会議の概要

日時：平成15年12月18日(木)10時00分から17時00分
場所：円山川上流域(県管理区間：八鹿土木事務所管内)

1. 開会

庶務担当の(株)東京建設コンサルタントが議事進行を行った。

2. 委員長挨拶

円山川流域委員会委員長藤田裕一郎(岐阜大学流域圏科学研究センター教授)が挨拶を行った。

3. 議事内容

3.1 現地視察ルートの説明

3.2 現地視察

3.3 その他

4. 審議内容および決定事項

4.1 現地視察ルートの説明

現地視察に先立ち、庶務から現地視察ルートについて、説明が行われた。

その中で、第6回委員会での審議結果に基づき、「田路川(とうじ)と山林の林床」を視察ルートに加える方向で検討したが、バスの車窓からは視察しにくく、視察ルートに追加できなかったことが報告された。そのため、推薦者である前田委員、また、この地域の特性に詳しい梶本委員の意見を伺い、委員長、庶務で検討した結果、田路川の北に位置する神子畑川流域の佐囊(さのう)地区であれば、同様の状況をバスの中からある程度視察可能と考えられたので、視察ルートに追加したことが説明された。

4.2 現地視察

視察は、円山川の国管理区間よりも上流部の河川整備の状況、ダム、源流域、主要支川の現状等について行われ、管理者である兵庫県八鹿土木事務所及び委員からの説明に対して、一般参加者を含めて、質疑・議論が交わされた。視察した地点と順序は以下の通りであった。

<現地視察ルート>

八木川・大屋川と本川との合流点、和田山竹田地区の整備状況、大路ダム、円山川源流域、朝来町佐囊地区、建屋川、八木川及びその上流域

<主な意見や質問>

(和田山竹田地区)

・「水辺の楽校」の管理は、誰が、どのように行っているのか。(岡本委員)

日常的な施設管理は和田山町が行っている。また、ゴミ拾いなどは地元住民のボランティアにも行って頂いていると思う。(河川管理者)

・洪水の時には、水はどのあたりまで上がってくるのか。(松田委員)

平成14年4月に開校してから、まだ高水敷まで浸かったことはない。(河川管理者)

・高水敷上の池には生活雑排水の流入が見受けられるようである。水に親しむためには、本流の導入等で水が入れ替わる工夫などは、出来ないか。(一般参加者)

基本的には、沢の水を導水しているので、それほど汚れてはいないと思われる。今後、下水の整備率を上げたり、他の状況を見ながら工夫していければと思う。(河川管理者)

(円山川源流域)

・木材価格が下落し、間伐された木材の引き取り手が無く、放置されている。また、まったく管理ができないため、ほとんど下草が生えていない場所もある。このように山が放置された状態で、雨が降れば、山の中から水が一気に流れ出るのではないか。(梶本委員)

間伐する手間賃が出せないために、全国各地で伐採木の放置が見受けられる。これは、国土として非常に大きな問題であり、河川に係わる面だけから見ても主要な要件として、何とか考えて行く必要があると思う。(藤田委員長)

(建屋川)

- ・建屋川での事業は、生き物的には面白い工法をとっていただいたが、河川工学や河川関係の専門家の中ではどのような評価を受けているのか。(池田委員)
自然を残すために水害を頻繁に起こすのでは意味がないので、治水を兼ねつつ、平常時の自然を大切にするという工法を国にも認めていただき、事業を実施した。また、施工面でも、全建賃をいただいている。(河川管理者)
- ・緊急を要する災害復旧工事であったので、国の特別天然記念物のサンショウウオであってもどの程度配慮されるのか懸念していたが、以前に比べると想像を越える配慮であった。対策には、姫路水族館館長の栃本さんの指導・協力が大きく貢献しており、行政と専門家との協力関係でも先駆的なものであったので、現地等でもこうした事情が広く伝わるような工夫も必要である。(池田委員)

(全般として)

- ・今日、視察した大路ダムは、予想以上に小さかった。ダムというのは、流域全体にどれぐらいの効果があって、無数のダムを作らないと効果がないものなのか、それとも大路ダムのような規模のダムを2つ、3つ作ればかなりの劇的な効果があるのか。(上田委員)
非常に難しい問題である。大路ダムの場合、ため池をレベルアップして、周辺の水利用の面をカバーする。それに加えて、少し容量を持たすことによって、限られた地域に対しての治水的機能を持たせている。この機能をさらに拡張しようとする、対象とする地域の大きさに合わせて、あるいはその背後の流域に合わせてダムの規模を大きくする必要がある。そうするとそれに適した場所が流域にどの程度確保できるかが最大のポイントになり、結局それが検討の対象になってくる。その結果、限られた数のダムで収まるような見通しが非常に高いのであれば、全国的に見ても着手されているところが多い。ダムを作れば、下流の洪水の基準地点で、どの程度洪水のピーク流量を軽減することができるということなので、算定方式はあるが、検討すべき指標が非常にたくさんあり、簡潔に説明するのは難しいところである。(藤田委員長)
- ・一定面積で比較すると、植林と広葉樹でどれぐらいの保水力が違うのか。また、木を伐採すると、どれぐらい保水力が落ちるのか等の研究データはないのか。また、これだけの大きさのダムだったら、これだけの場所を伐採した分に相当するという指標、データはないのか。(上田委員)
森林が変化していく速度と人間が施設整備をしていく速度のギャップが余りにも大き過ぎることもあり、広葉樹、または針葉樹、あるいは土地開発地域の状況に応じて、各々の流出形態の変化をきっちりと予測評価できる手法は、現在ほとんどないと思われ、その答えをつかむに至っていないと理解しており、大きな課題だと認識している。(藤田委員長)
- ・山地部の異なった地表条件を持つ場所について、地中水分量の継続的な計測を行ったデータを持っており、水分量は地表の状態毎に特徴的な変化をすることを確認している。これは、山地流域の遊水・保水機能を評価し、その増進を図る上で参考になるのではないか。(前田委員)
大変貴重なデータである。山地流域の遊水・保水機能を適切に評価するには、様々な地域で地表・地中の水分移動の実態をあきらかにした上で考察していかなければならないので大変参考になると思われる。(藤田委員長)

4.3 その他

- ・次回の第8回委員会が2月3日(火)に実施されることが、庶務より報告された。